

新学習指導要領実施2年目となる2023年度は、初年度の総括を踏まえた指導改善が求められる。現場の疑問や課題を解決し、新たな計画・実践につながるよう、全国の実践事例や解説記事を提供する。

— 疑問や課題を解決！実践につながる！ —

新課程レポート

ベネッセ教育情報センター

テーマ

新課程初年度の総括と今後の展望

実践レポート

「育成を目指す資質・能力の設定と共有」を出発点に、
観点別評価や探究学習を深化させる

秋田県立湯沢高校

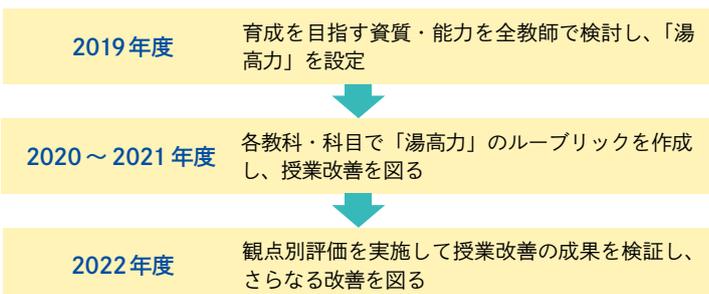
秋田県立湯沢高校では、生徒の実態を踏まえて、育成を目指す8つの資質・能力「湯高力」を設定。それを基に各教科でルーブリックを作成し、授業改善や観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）を推進してきた。さらに、2022年度から「デジタル探究」を設定し、デジタルツールを活用した新たな探究学習のあり方を模索している。

「湯高力」の育成に向け、 授業改善を推進

秋田県立湯沢高校は、2019年度からカリキュラム・マネジメントの観点で教育改革を推進してきた。教師が対話を重ね、生徒の現状と目指したい姿を語り合い、校訓や新学習指導要領で示されている資質・能力の3つの柱とひもづけをしながら、育成を目指す8つの資質・能力「湯高力」を設定。さらに、「湯高力」を、教科・科目ごとに「習得（わかる）」「利用（できる）」「活用（使える）」という3段階のルーブリックで示した。

20年度は、「湯高力」やルーブリックを基に、授業改善を推進。授業の冒頭に、本時で育成を目指す「湯高力」を示して、生徒も教師も「湯高力」を意識して授業に臨むようになった。さらに、定期考査の各問題に、測ろうとしている「湯高力」を明示する試みも始まった。そうした取り組みが校内に浸透するのに伴い、次第に生徒も、「湯高力」を意識して学ぼうようになっていった。その後も校内で研修を重ね、授業実践と改善を繰り返して、ルーブリックを用いた観点別評価を導入するなど、取り組みを深化させていった（図1）。

図1 湯沢高校の教育改革の流れ



※「湯高力」の策定やこれまでの湯沢高校の教育改革の詳細は、『VIEW next ONLINE』で紹介（詳しくはP.33）。

設立 1943（昭和18）年
形態 全日制／普通科・理数科／共学
生徒数 1学年約175人
2022年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、岩手大、東北大、秋田大、山形大、千葉大、新潟大などに67人が合格。私立大は、盛岡大、東北学院大、獨協大、東海大、日本大、同志社大などに延べ132人が合格。

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

「湯高力」を軸としたルーブリックを用いて、生徒の学習改善と教師の指導改善を推進

観点別評価の導入を機に、授業改善が大きく前進

19年度からの教育改革を素地として、22年度には、「湯高力」をベースとしたルーブリック(図2)を用いた観点別評価を開始した。「湯高力」の作成の中心となった2学年主任の平田恵子先生は、「全科で評価方法に関する表記を統一するなどして、生徒にとって、『何を、どのように評価されるのか』が分かりやすいルーブリックを目指しました」と説明する。

観点別評価の実施は、授業改善を前進させている。1学年主任で地理歴史・公民科担当の高橋伊津子先生は、「観点別評価が加わり、『この資質・能力を評価するにはこんな活動が必要だ』などと逆算して指導を見直しています。例え

ば私の授業では、『湯高力』の対話力や協働力を育む目的で、対話表現活動を充実させています」と語る。一方、数学科担当の柴田和

明先生は、「話し合いを増やしたことで、アウトプットに必要な知識・技能の不足が明らかになったため、思考・判断・表現の土台となる基礎を習得する学びを手厚くしました」と、「湯高力」を軸とした授業改善を語る。

各教科での試行錯誤は、互見授業や研修を通して全校で共有され、他教科の取り組みを参考にし、互いに高め合う姿が見られている。小松弘樹校長はこう述べる。「教師が観点別評価を前向きに捉え、自由に議論を交わす中で、主体的に授業改善に取り組む風土が生まれています。本校に異動をしてきた教師の授業が、みるみる

変わる様子も見られています」
 観点別評価は、生徒の学びにも変化をもたらしている。特に、日々の授業や定期考査などでの「湯高力」を意識させる働きかけを通して、生徒が学びの意味や目的を考えるようになったことが大きい。
 「獲得した知識を生かして主体的に授業に参加する生徒の姿が見られています。難しい問題に粘り強く挑戦したり、教師が希望者向けに用意したプリントに意欲的に取り組んだりする姿も見られるようになりました」(平田先生)

図2 2022年度から運用している科目別ルーブリック

| 科目 | 地理総合 | | |
|---------|---|--|--|
| | 単位数 | 2単位 | |
| 目標 | ・世界の生活文化の多様性や地球の課題への取組などを理解し、地図や地理情報システムなどを用いて、調査や資料から様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付ける。 ・地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を、多面的・多角的に考察し、課題の解決に向けて構想する力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、議論したりする力を養う。 ・課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養い、日本国民としての自覚、国士に対する愛情、世界の諸地域の様々な生活文化を尊重しようとする大切さについて自覚を深める。 | 履修学年/学科/類型 1学年/普通・理数 | |
| 評価の観点 | 知識・技能 | 思考・判断・表現 | 主体的に学習に取り組む態度 |
| | 湯高力 | 【課題対応能力】 【対話力】 | 【協働力】 【自己管理能力】 【前向きにやり遂げる力】 【公共心】 |
| | 活用(使える) | ●地理に関わる諸事象の意義や意義、特色や相互の関連を、位置や分布、場所、人間と自然環境との関係、空間、地域などに着目して、一般化した概念を用いて、世界各地の諸事象を捉えることができる。 ●地理的な課題の解決に向けて、考察や構想したことを効果的に説明したり、それを基に議論したりしている。 | ●よりよい社会の実現を視野に、地理に関わる諸事象についての課題を主体的に追究しようとしている。 ●日本及び世界の諸地域の生活文化の多様性を尊重し、国際理解や国際協力への関心を高めるとともに、持続可能な社会づくりに必要なことを他者と協働して考え、取り組もうとしている。 |
| | 利用(できる) | ●地理に関わる諸事象の意義や意義、特色や相互の関連を、位置や分布、場所、人間と自然環境との関係、空間、地域などに着目して考察している。 ●地理的な課題について、問題の発生原因や現象を的確に捉え、それらに関連づけて考察し、まとめることができる。 | ●よりよい社会の実現を視野に、地理に関わる諸事象についての課題を主体的に追究しようとしている。 ●日本及び世界の諸地域の生活文化の多様性を尊重し、国際理解や国際協力への関心を高めるとともに、持続可能な社会づくりに必要なことを考え、個人として取り組むことができる。 |
| 習得(わかる) | ●地理に関わる諸事象に関して、世界の生活文化の多様性や、防災、地域や地球的課題への取組などを理解している。 ●地図や地理情報システムなどを用いて、調査や資料から地理に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめている。 | ●地理に関わる諸事象の意義や意義、特色や相互の関連を、位置や分布、場所、人間と自然環境との関係、空間、地域などに着目して考察している。 ●地理的な課題について、問題の発生原因や現象を的確に捉え、それらに関連づけて考察し、まとめることができる。 | ●よりよい社会の実現を視野に、地理に関わる諸事象についての課題を主体的に追究しようとしている。 ●日本及び世界の諸地域の生活文化の多様性を尊重し、国際理解や国際協力への関心を高めるために、持続可能な社会づくりに必要なことを考え、個人として取り組むことができる。 |
| 評価方法 | ・定期考査(筆記) ・小テスト ・提出課題 | ・定期考査(筆記) ・提出課題 ・グループワーク | ・振り返りシート ・提出課題 ・授業時の観察 |

20年度から「湯高力」の育成を目指し、教師、生徒がルーブリックを運用してきたが、観点別評価の導入に伴い、観点別の要素を各教科で話し合いながら検討を進め、新学習指導要領に準ずる内容への修正や、評価方法の表記を教科間で統一した。

※学校資料をそのまま掲載。

デジタルツールを活用して、「学び方を学ぶ」探究学習を実践

「学び方を学ぶ」を目的にデジタルで探究学習を深化

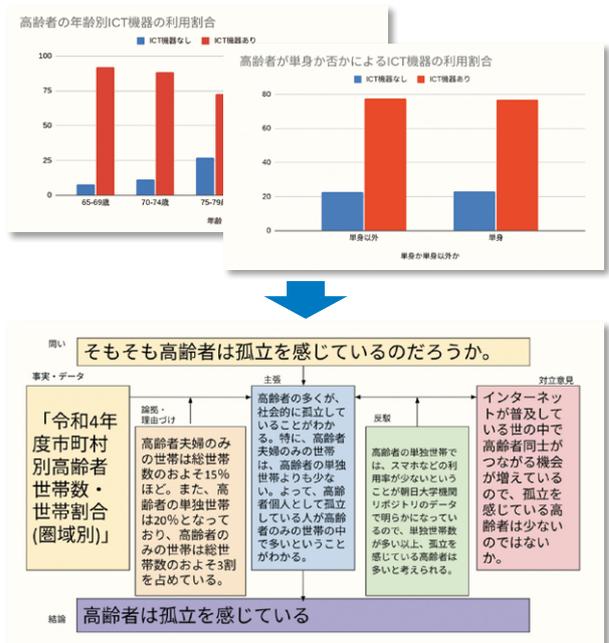
同校では、22年度、秋田県教育委員会による研究事業として、従来の探究学習にデジタルツールの活用を取り入れた「デジタル探究コース」を新設。本格的な活動は23年度の2年生からだが、22年度は京都大学大学院教育学研究科の久富望助教の支援を受け、1年生全員を対象に「デジタル探究」という科目を設定した（*1）。

「情報技術を活用して教科横断的な学習を行い、問題発見・解決を通して、『湯高力』を伸ばすこと」を目標としました（小松校長）。22年度の「デジタル探究」は、1年間を3クールで構成した。1クール目は、プログラミング言語のPythonを用いて、全国と湯沢市の人口データを比較するグラフ

を作成し、生徒同士が批判的な視点で意見を交わし合った。2クール目は、湯沢市の課題から関心の高いものを選び、データ分析などを行いながら解決策を探った。3クール目は、三角ロジック（*2）や対話型論証モデル（*3）などの思考法を学び、1年間かけてデジタル探究の土台となる力の育成を図った（図3）。

「『学び方を学ぶ』ことを目的として、探究学習でデジタルツールを活用すると、どのような学びが生まれるのかを、教師自身も考えながら取り組みました」（高橋先生）。生徒のデジタルツールの活用状況について、1学年副担任の大隅哲也先生はこう述べる。「プログラミングでは苦勞する生徒も多くいましたが、グラフの作成などのデータの活用方法がすぐに習得していました。さらに、

図3 データ分析と対話型論証モデルによる考察



ある生徒は、「インターネットが普及し、高齢者同士がつながる機会が増え、孤立する高齢者が減った」という仮説を、データ分析と対話型論証モデルを用いて考察した。まず、スマートフォンやパソコンなど、非対面でも人と交流ができる情報通信機器の利用状況を分析し、対話型論証モデルで「情報通信機器が普及する中でも高齢者は孤立を感じている」と、自身の結論を導き出した。 ※学校資料を基に編集部で作成。

生徒同士で主張をし合うなど、思考力を発揮する場面では、私たちが想像していた以上の力を発揮していました」

既に、データ分析などを通じて身につけた論理的思考力を他教科の学習に生かしたり、反対に、教科学習で学んだことを探究学習に活用したりする往還が見られているという。例えば、公民科の授業で領土問題を取り上げた際、多様な意見を踏まえて論理的に思考して解決策を探ることが求められる

場面があった。生徒は、「デジタル探究」でデータを基に主張や反駁をした経験を思い出し、論じ合っただけでなく、データ分析やプログラミングといった「学び方」の習得を教育目標にしたため、他教科の学びに生かすことができた（平田先生）。

23年度は、2年生の希望者が「デジタル探究」をさらに深めていく。扱うデータが多様になれば、学習はさらに広がっていく。

* 1 本実践は、京都大学国際高等教育院附属データ科学イノベーション教育研究センターから支援を受けた。
 * 2 自分の意見を説明するために、「事実・データ」「論拠」「主張」の3つを明確にする論理的な思考法。
 * 3 ある問題に対して、他者と対話しながら、根拠を持って主張を組み立て、結論を導く活動を図式化したもの。P.20に、考案者である京都大学大学院教育学研究科の松下佳代教授のインタビューを掲載。



校長
小松弘樹
こまつ・ひろき
教職歴 37 年。同校に赴任して 3 年目。



2 学年主任
平田恵子
ひらた・けいこ
教職歴 20 年。同校に赴任して 5 年目。国語科。



1 学年主任
高橋伊津子
たかはし・いつこ
教職歴 21 年。同校に赴任して 5 年目。地理歴史・公民科。



1 学年担任
柴田和明
しばた・かずあき
教職歴 10 年。同校に赴任して 1 年目。数学科。



1 学年副担任
大隅哲也
おおすみ・てつや
講師歴 11 年。同校に赴任して 2 年目。理科。

新課程初年度における成果と展望

取り組みを通じた対話の活性化が、教師と生徒の成長につながる

すべての教師の実践で、よりよい学びを追究

観点別評価の実践を進めるのに伴い、新たな課題も見えてきた。現在は、どの教科でも、8 つの資質・能力のすべてを育成する方針だが、教科の特性に応じて軽重をつけてもよいのではないか。生徒がこれまで以上に何を頑張ればよいかを自覚し、自己調整ができる

「議論だけに終始せず、出てきたアイデアをまずはひな形にして実践を重ね、改善していく中で、よりよい形を模索していきたいと考えています」（平田先生）
新課程に向けた新たな取り組みを進める中で、校内では対話や議論が活発になり、そこから形に

なったものが生徒の成長につながっているという実感を教師たちは抱いている。
『デジタル探究』などに取り組む中で、先が見えない社会で教育も変化が求められているため、『どうすればよりよい学びを生み出せるのか』を追究することの大切さを感じました。本校は、教育改革に全教師で取り組んだからこそ、大きな成果を得られたと実感しています。課題はまだ多いのですが、『こうでなければ』といった思い込みを捨て、刻々と変化する状況に対応しながら、今後も全教師で新たな教育を考え続けていきます」（小松校長）

2021 年度に公開した秋田県立湯沢高校の新課程レポートは、[VIEW next ONLINE](https://view-next.benesse.jp/view_section/bkn-hs/article01062/) でご覧いただけます

● 21 年度 4 月号 生徒の実態から育成を目指す資質・能力を設定し、科目別ルーブリックで授業改善を図る
https://view-next.benesse.jp/view_section/bkn-hs/article01062/

● 21 年度 6 月号 科目別ルーブリックを授業に落とし込み、教師の指導、生徒の学びの質を高める
https://view-next.benesse.jp/view_section/bkn-hs/article01814/

新課程に関する情報は、『[ハイスクールオンライン](https://bhsso.benesse.ne.jp/hs_online/sidou/shinkatei/shidou/index.html)』でお届けします！

● 新教育課程の参考になる特設コーナー設置 ● 過去のオンラインセミナーのアーカイブ動画・資料などを掲載！